

私たちの四半世紀～最初の5年

野崎隆一（理事長）

25年前、3連休の終わった早朝、激しい突き上げるような衝撃に目覚めた私たちは、食器や家具の散乱した部屋を片付けながら、どこかの震源地はさぞかし大変だろうと思っていた。やがて、兵庫県南部が、被災の中心であると判明、家族や知人の安否確認に奔走する日々が続き、交通インフラの復旧に伴い、被災が、私たちの住み慣れた地域に限定集中的であり、「我がこと」である私たちと、「人ごと」である周囲の人たちとのギャップも明らかになってきた。

行政の復旧復興方針が、発表されるに従い、被災各地で議論が沸騰、連日連夜複数の会場で報告や討議が行われた。大きなエネルギーに満ちたカオスの中で、私たちは出会い、知り合い、つながっていった。地域の将来を考えるグループ、語り部として被災地外に出かけるグループ、復興施策を提言するグループ、一年後これらが集まって「神戸復興塾」が誕生。現場につながる「知」を大切に、毎月集まり、情報を集め、議論し、解析し、伝える活動を続けた。「復興公営住宅入居前交流会」「NPOと行政の生活復興ラウンドテーブル」などの提言、「復興公営住宅コミュニティ支援研究会」などの実施。1998年NPOの法制化を機に、サンフランシスコNPO視察ツアーを行い、多様な活動に触れ、多くを学んだ。そこから、市民活動への寄附と体験の承継を目的に「神戸あいウォーク」が発想され、わずか5ヶ月の準備で1999年1月17日の第1回には3,500人を集めた。

震災から5年という節目に、震災をきっかけに始まった活動を持続的で定着したものにして協賛して、「現場の知」を基盤にしたコミュニティシンクタンクを目指す「特定非営利活動法人・神戸まちづくり研究所」を設立した。そこには、同志的連帯を重視し、多様な考えを排除せず、100議論して、10行動するという議論好き「神戸復興塾」のDNAが確実に引き継がれていた。

以来、このDNAを新たな被災地や次世代に伝えていきたいと考え「ふっこうバル in 仙台」や「みなみあそ復興塾」「朝まで神戸復興塾」「復興まちづくり塾」などを行ってきたが、東日本や熊本に出かけても、辛抱強く救済策を待つ姿が多く、議論が沸騰し、エネルギー溢れるカオスにはなかなか出会えていない。「まちづくり」は、個人の再生に支えられた「人づくり・社会づくり」と同義であることを忘れてはならない。

【特集】阪神・淡路大震災 25 年に寄せて 『あの時、私は』『私の 25 年間』『今後に向けて』

“2020 年はオリンピック・イヤー”と言われていますが、神戸近辺の私たちにとっては、人生を大きく変えたあの阪神・淡路大震災から四半世紀、という節目の年でもあります。復刊第 2 号の特集は、下記の 3 つのテーマで、まち研会員に投稿してもらいました。

- (1) あの時、私は：震災当日や直後の動きや感じたことを振り返る
- (2) 私の 25 年間：震災で人生がどう変わったか等のライフヒストリー
- (3) 今後に向けて：26 年目以降の復興まちづくりや市民社会の構築に向けた提言、決意など

【特集担当：相川康子】

(1) あの時、私は

「日記 My Longest Day@1995 年 1 月 15 日 灘区水道筋 震度 7」

大津 俊雄（神戸国際大学 野窓）

AM5：46。夢の中でドーンと蹴り上げられた。頭上の本箱が飛び跳ねてきて、それと床の間に体が挟まれて、ゴロンゴロンと揺さぶられた。「アア死んで行くのだなあ」と浮遊した自分が見下ろしていた。その後どう動いたか、記憶は飛んでいる。外を見ても真っ暗で、町は不気味に静まり返っていた。家族の無事を確かめた。「これって地震、かな？ 地震の無い神戸でこんなに揺れるなら、東京はもう壊滅しているな」と直感した。息子は「助けて！」という金切り声と、その後のすすり泣きを聞いた。裏の家の娘さんがピアノの下敷きになったようだ。

夜が明けてきた。私のマンションの壁はバリバリに壊れ、鉄筋がむき出ししていた。亀裂の向うに町が見えた。木造の家が将棋倒しに傾いていた。「デズニーの書割だな」と思った。部屋の床は食器とガラスの破片の海で、朝日に輝いていた。「水晶の夜」という言葉（ワルシャワゲットー）がふと口を突いて出た。その上に毛布を敷き詰めて、玄関扉への道を作った。鉄棒が歪んで戸が開かない。閉じ込められた恐怖心で汗がにじむ。戸を蹴りまくると、ギギーと開いた。同じ階の人と手を取り合って無事を喜んだ。自宅は大破していたが、柱や梁は無事であった。

街へ飛び出た。停電の TV では情報が入らないので、小型ラジオをポケットに入れて。見慣れた家々は全半壊していた。道路は大渋滞で、消防車・救急車さえ歩く速度でしか進めない。サイレンが空しく響き渡る。東方の空から黒い煙が立ち登っている。初めて見る異界に度肝を抜かれて、自転車で駆け回った。自宅の北 100m に阪急電車の線路があり、そこから山手



側の中級住宅は無傷（震度 6）であった。出勤しようと駅に向かう人さえいた。「オオ！神は何と気紛れなんだ。貧乏人の家を壊して。」それ以来、私は神仏を信じない。浜手側の下町へ回ると、青年達が戸板を持って走っていた。小さな病院の入口に人が溢れていた。中では怪我人か死体か分からない人体が、廊下に並べられて、医者は「骨折くらいで来るなや」と叫んでいたようだ。彼も現場を確認できない混乱の中で、本当の死因など分かるはずもない。どれも圧死、圧死！？

ふと義理の父母が心配になった。阪神電車の方へ下って行った。景色は更に一変した。目指す木造長屋は、1階が腰砕けで崩壊し、2階はドミノ倒しになっていた。「葬式はどう手配すればいいのか？」と一瞬に思った。幸い父は無傷で、戸外に呆然と立っていた。母は1階に寝ていたようだ。壁の穴から大声で呼ぶが、空を舞う報道各社のヘリコプターの爆音に掻き消されて、生死がわからない。何度か呼ぶと、かすかに声がした。真っ暗な穴に這い進んでみるが、瓦礫に阻まれて前進できない。「ミシッ！」という音の余震が来て、あわてて穴から脱出した。

「母を助けられるか、自分が死ぬのか。」ビクビクして突入を繰り返すうちに、母の姿が見えた。意外と無傷で這い出て来た。どうも下敷きになった空間で、寝間着から外出着に着替えようとしていたらしい。身一つで、何も持ち出せなかった。私は靴と車を借りに、友人宅へ走った。彼は言った。「大津さん、額から血が流れてるよ。」そうか、痛みも感ぜずに走り回っていたのか。ともかく父母を寒い自宅に連れて来れた。



そうだ「A君は無事だろうか？」と心配になった。天安門事件で日本に逃れてきた好青年だ。死なせてなるものか。六甲道の火災を横目で見ながら、下宿先に急いだ。家は真っ二つに割れて、中味が全部はみ出していた。しかし、生存できる空間はあった。生存を信じて、六甲小学校へ駆け込んでみた。体育館は既に避難者がギッシリと座り込んで、みんな無口であった。人の隙間を掻き分けながらA君の顔を捜したが、居なかった。諦めて校庭に出ると、フィリピン女性が泣いていた。学校は避難者で溢れていたのだから、それ以上の入場を断わられたようだ。異国の体験は怖かったろう。彼女は何か食べられたか。どこで寝るのか。冬の落日は早い。（後日A君の無事を知った。）

自宅に戻った。上下を逆さに一度回転したような室内を何とか片付け、隙間に毛布を敷いて家族で車座に座り、「最初の晚餐」を食べた。みんな朝から何も食べていなかった。しかし混乱・緊張・興奮の連続で、空腹は全く感じなかった。冷蔵庫には昨夜の冷や飯とカボチャ煮が残っていて、救われた。この時だけは神に感謝した。蝋燭の炎が皆の顔を揺らした。「こりゃキャンプごっこだなあ」と冗談を飛ばした。新聞紙を分厚く敷いて、靴を履いたまま着のみ着のまま布団を被ると、疲れでコトンと眠りこけた。明日から始まる地獄のごとき復興の幕開けを、私はまだ知らなかった。夜空には救急車のサイレンが、近く遠くにいつまでも鳴り響いていた。

「あの時、私は…被災地の一住民として気づいたこと」

立間 康裕（監事、(株) 奥村組 関西支店）

震災当時、私は第3セクターに出向しており、公務を執行する立場にはいなかったし、自宅も半壊状態でもあったため、震災復旧や復興には全く携われなかった。このことがボディブローのように残っていて、NPO活動への関心や東北大震災への係りに繋がったと考えている。しかし、被災地の一住民の立場として、公務とは異なった視点で当時を過ごした事は、下記の様な実態の一部を体験でき、多少の意味を持たたのかも知れない。

○住区に避難を呼び掛けに回ったが、一軒が照明代わりにストーブを！

（無知な住民の存在、老人家屋等の情報不足も）

○避難所の小学校に着くと、門前で避難者が校内に入れず、守衛を説得！

（現場判断への平常時からの周知不足）

○倒壊マンション周辺への巡回やガス漏れへの対処など、住民の自衛団で活動！

（「地震来て、地固まる」てか！）

○ガスコンロ、ブルーテント（雨対策）、飲料水などの支援の有難さを痛感！

（感謝！）



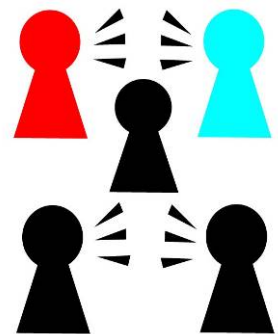
「カオスの淵に立ってカタストロフを眺める」

田村太郎（理事、ダイバーシティ研究所代表）

95年12月の「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」で、私に「きみ、おもしろいね」と声をかけてきたのは大津さんだった。震災1年のイベントを手伝ってほしいという。指定された場所に出かけてみると、そこに三谷さんと森栗さんもいた。初めまして、のあいさつもそこそこにみなでアイデアを出し合うが、まとまらない。菅原市場での「朝まで生討論」に企画が落ち着いたのは、年が明けてからだったように思う。

東京から帰ってきた語り部キャラバンを迎え、朝までの大激論を展開。明け方の追悼式で報道陣の傍若無人ぶりに三谷・森栗の両先生は激高するし、なんだかとんでもない世界に足を踏み入れてしまったなあと思ったが、時すでに遅し。

阪神・淡路でポッと出てきた私を「復興」の世界に引きずり込んで下さったみなさんに感謝するとともに、25年の時を経てますます混乱する社会の再興に向け、あの頃のように本気で知恵を出し合いたいと思う。



(2) 私の25年

「消えた南太平洋の夢」

小森 星児（初代理事長、神戸商科大学名誉教授）

還暦の年に震災に遭遇した。人生のゴールを迎えて、思いもよらず延長戦に入ったようなものだ。新しい職場に3回も移ったし、住まいに至っては6回も転居した。タヒチ島でヨット三昧との老後設計もご破産になり、今は海のない篠山での田舎暮らしで辛抱している。

震災後は忙しくなった。まず復興計画に取り組んだ。さらに大学院と大学の創設に関わり、学長も務めた。3つの学会の関西支部長も断り切れなかった。加えて罹災マンション復興第1号の理事長として、他に例がないコーポラティブ型のマンション再建を実現した。神戸復興塾や神戸まち研のまとめ役としても、現場に率先して飛び込む流儀をモットーとした。



震災後8年目に転機を迎えた。基金100億円を擁するひょうごボランティアプラザの初代所長として、市民活動支援の側に回った。資金を使う側から配る側への転身なので、仕組み1つ作るにしても勉強になることが多かった。この経験は今の（公財）ひょうごコミュニティ財団代表理事の仕事で役立っている。

震災後引き受けた仕事の多くは新設とか最初のという形容詞が付く。同僚・友人に恵まれ、その助けで海図のない分野に挑戦できたのは幸せであった。

「25年の凹凸道」

島田 誠（ギャラリー島田）

震災の夜にイギリスから関空に帰着。2月18日に「アート・エイド・神戸」設立。7年間活動。「兵庫アートウィーク・イン東京」や「イン福岡」では神戸復興塾とも一緒した。被災者復興支援会議の熱っぽさが懐かしい。2011年、亀井純子基金を公益財団法人「神戸文化支援基金」へ。

同年「アーツエイド東北」設立。加川広重 巨大絵画プロジェクト（'13,'14,'15年）では神戸と東北を繋ぐあらゆる課題を取り上げ、最後はフクシマ原発を正面から問うた。5回10年続いた神戸ビエンナーレも「Stop&Change」で中止となり新しいプロジェクトに繋がった。

行政からも文化団体からも遠ざけられ、25年間で神戸市の会合に呼ばれたのは昨年の一回だけだ。しかし、神戸の文化の土壌を変えるということについては阿吽の呼吸で、私の日々はHeal（癒し）なのに、時にHeel（悪役）を務めている。

（注）本年3月11日～25日。加川広重展：ギャラリー島田。描き下ろしの大作で埋め尽くす。

<http://gallery-shimada.com/>

「私的四半世紀伝」

辻 信一（まちづくりコンサルタント）

時系列混乱、公私混載。

四五歳、就寝中大揺、家族安泰、自宅集合住宅一部損壊補修、実家焼失、両親仮設住宅、乗合自動車通勤二時間、復興計画種々参画、瓦礫之向日葵、復興市民社区营造支援ネットワーク、松本区画整理・浜山共同化・森南区画整理・新開地再開発・集合住宅建替・公園計画工作坊多数・其他社区营造支援、神戸復興塾、造園復興支援ネットワーク、社区营造工作坊研究会、花緑市民ネットワーク、震災復興記念公園、自宅建築大借金、息子結婚、伯国音楽、中越地震、東日本大津波・雄勝立浜・気仙沼・石巻・閉上・山元復興支援、息子離婚、熊本地震、愛犬永眠、神戸中南米音楽協会、会社離脱個人営業、大阪地活協支援、大阪農業専門委員、明石都市景観委員、兵庫功労者、父永眠、新犬飼、戦災空中写真、建物疎開跡地防火水槽、城崎交通社区营造、地図偏愛、七十歳

注) ネットワーク：ネットワーク、社区营造：まちづくり

工作坊：ワークショップ

何を書こうかと考えるに、漢字仮名交じり文ではスペース不足は目に見えるので、漢字縛りにしてみました。

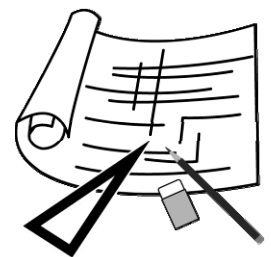


「私の 25 年間（建築に関わって）」

野崎 瑠美（建築士）

あの大震災からの 25 年間は波乱に満ちた濃密な日々だったはずですが、振り返ると夢の中のようにも感じ、ただ目の前のことを解決すべく自分に出来ることを淡々と引き受けて過ぎていったような気がします。建築設計を仕事としていた者として、この 25 年間の建築に関わることに焦点を当ててまとめてみました。

★震災直後からの住宅診断と相談 ★建築士会での応急危険度判定の事務処理 ★関西建築家ボランティア団体での活動 ★被災住宅の改修や改築などの再建 ★コミュニティを重視するコレクティブハウジングの勉強会 ★瓦礫を前にして、環境と共生する住まいの勉強会と実践 ★シックハウスを回避する建築材料や構造を考える勉強会と冊子発行 ★民間コレクティブハウスの建設 ★建築士会の女性部会長や神戸支部長としての活動と役割遂行 ★歴史的建造物の保存活動 ★すべての人が参加できる社会を目指すユニバーサルデザインの研究会と啓蒙活動 ★安全なエネルギーを考える会 etc.



「30歳→55歳 あの当時、皆さんこの年齢でよく頑張られたものだ！」

松原 永季 (副理事長、スタジオ・カタリスト)

神戸市中央区山手のマンションで被災。強烈な揺れの記憶は、体に未だに残る。幸い、家族・住処ともに無事。震災当日、当時在籍した事務所の建物（海岸ビルヂング）まで徒歩で向かう。街の惨状を見つつ移動するも、死傷者には全く出会わず、今思えば不思議。ひと月ほど事務所ごと大阪に避難するも、帰神後は復旧と復興まちづくりに呑み込まれる。

その後、密集市街地再生、市民協働参画、小規模集落再生、景観形成、空き家再生、他都市の防災まちづくりへと「住民主体のまちづくり支援」を核とした業務が際限なく拡大。多忙は延々と極



まっており、この間、本来テーマとしていた「建築」については、ほとんどお預け。もちろんこれまでの延長線上にもあるものなので、それを踏まえた設計にきちんと取り組みたいなあ...、というのがここ20年ぐらいの希望です。

49歳で結婚。今は3歳児の子育て中。来春4月に第2子誕生予定。

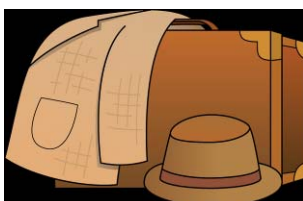
「自由俳句で詠む私の震災」

三谷 真 (元大学教員)

- ・大地揺れ今も歪んだわが家かな
- ・ひと月は滝谷町で父母（ちちはは）と
- ・ボランティア受け入れ側もボランティア
- ・年の差を凌駕する聡明さ
- ・動き出す若人たちに教えられ



- ・下町の良さを見つけてまちづくり
- ・寅さんに逢えたら楽し市場跡
- ・いざ伝えんこの体験を東京に
- ・復興の知恵を集めてHUBとなり
- ・NPOという響きに魅せられて
- ・歩いて歩いて被災地の今を知る
- ・出会いありネットワークが宝物



「防災の専門家としての反省と学び」

室崎 益輝（兵庫県立大学減災復興政策研究科長）

1月17日の大地震の瞬間から、多くのことを教えられた。防災の専門家として教えられたことは、常に自然に対して謙虚であること、市民とともに減災に努めること、リスクを正しく想定するよう心掛けること、である。

過去の記録にしがみついて地震の想定を行った過ち、市民とのリスクコミュニケーションを疎かにした過ち、地震学を含む他分野との協働を怠った過ち、事前の減災に戦略的に取り組まなかった過ちなど、専門家としての過ちに気づかされた。

その過ちに向き合いつつ、被災者の苦しみを少しでも和らげようとし、減災の科学の狭さを少しでも克服しようとし、多くの友人と少しでも力を合わせようとしてきた25年であった。安全で安心な社会に少しは近づいたと思いたい。

減災と復興の取り組みの中で、多くの素晴らしい仲間と巡り合えたことで、この25年を肯定的にとらえたいと思う。多くの仲間との巡り合いに「感謝」。



（3） 今後に向けて

「私の感性の鈍化…であれば、いいけれど」

相川 康子（監事、NPO 政策研究所専務理事）

25年は長い。1995年～2000年前後の事柄～とくに「創造的復興」や「新しい市民社会」を巡る議論、それに「参画と協働」の具体化に向けた試行錯誤は、ある種の高揚感とともに思い出せるのだが、悲しいかな、ここ7～8年の出来事は、あまり印象に残っていない。私個人が劣化（記憶力の低下もしくは感性が鈍化）したのか、市民社会に向けた取組が停滞あるいは分断しているのか…？

たぶん前者だろうと自省しつつ、当時の思いや到達点が、次世代に伝わっていないとすれば寂しい。戦後50年の節目で起き、価値観の変革を迫られたこと。「社会実験」を繰り返し、法制度に風穴をあける運動にも挑みながら、地方分権型・市民社会型の復興を目指したこと。根付いたものもあれば、あだ花と消えたものもあるが、制度化された後に形骸化し、当時の“志”を失ってしまったものも少なくない。年を重ね「諦め」が先に立つ毎日ではあるが「義憤」や「率先」の心は持ち続けたいものだ。



「震災 25 年。これから考えなきゃいけないこと」

浅見 雅之（事務局長、人・まち・住まい研究所）

考えれば考えるほど 1.17 は転機だった。右肩上がり社会が、右肩下がりに変わる時代。大災害で培われたものに、ボランティアな活動という美しいものを数える人は多いけど、一方で顕わになったのは、行政という大きな仕組みだけではこの社会は回らないという現実でもあった。

災害直後、多くの人々が「困った時には地縁社会が大きな支えになる」と改めて認識したけど、一方で震災当時活躍した人が地域の代表となってそのまま 25 年が経過し、制度疲労を起こしているところも多い。

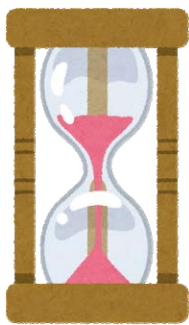


議論は一周回って「行政だけじゃ回らないから地縁社会がしっかりしなきゃダメ」に話が戻ってきて、その上「市民協働社会もデザインが悪いと長続きしない」ことも明らかになった。今、まさに、社会の全リソースをこの課題の解決に投入してもいいと思えるほどの地域社会の危機。ここ数年は、この 25 年でたどり着けなかったものが何かを明らかにし、新たな課題解決に向けた議論をする好機のように思う。

「もはや災後ではない？」

川中 大輔（理事、龍谷大学社会学部講師／シチズンシップ共育企画代表）

阪神・淡路大震災は過去のことである。そのように書けば、大切な人やものを失った方々の悲嘆が完全に消えることはないのだから、あるいは、震災が剥き出しにした現代社会の構造的問題を創り変えていく「復興」は未だ途上にあるのだから、誤認であると批判を受けるだろうか。



しかし、「被災地」と呼ばれた地域に住む人々の多くは、被災経験の有無に関わらず、心の奥底で「(災害への備えは大切だけれども)神戸で大きな地震は当面ない」と思っているのではないだろうか。災後／災間を生きているという感覚は薄らいでいるだろう。その意味で災害への危機意識は「元通り」になったと言えよう。この 25 年間、日本各地で大規模災害が起こり、私たちにとって災害は常に身近であり続けているが、我が事としての切実感は弱いだろう。

天災は忘れた頃に来る－被災のリアリティを忘れるに十分な年月が過ぎた。今だからこそ生ずるこの警句の重みを、その質感も含めてどのように若者と共有していくか。学びの場に携わるものとして大きな課題である。

「第三クォーターから、第四クォーターへ」

野崎隆一（理事長、(株)遊空間工房）

人生 100 年と考えると、私の人生は、おおよそではあるが、1943 年から 1967 年が第 1 クォーター。1968 年から 1994 年が第 2 クォーター。そして、1995 年から 2019 年が第 3 クォーターということになる。

第 1 の転換期は「1968 年～世界的若者反乱」、第 2 の転換期は「1995 年～阪神・淡路大震災」。不動産の商品企画→建築材料の輸入販売→復興コンサルタント・建築設計まちづくりと仕事を 2 回大きく変えたため、キャリアの蓄積というものには無縁で、アマチュア的好奇心に支えられ、それ

ぞれの転換期で、それまでためてきたバネを解放して走ってきたように思う。



第 3 の転換期を迎え最終クォーターに差しかかる今、蓄積されたバネの点検と、さらなるジャンプか、内向的な総括の旅か、道筋の選択に迷っている。近年 2 回も引越しをしたため、段ボール箱に封印していた'60~'80 年代の本たちに再会して、自分の人生のパースペクティブを意識している。

「緊急時での生活(人生)継続力強化へ」

萩原 正五郎（理事、萩原都市・建築計画事務所）

災害復興には「生活基盤であるコミュニティ復興」とともに「雇用の場である産業経済復興」が重要である。特に生活に密着した小規模企業の産業経済復興は災害直後の初動の対応がその後の経済活動を大きく左右する。各地で災害が目立ち始めた十数年前頃から、BCP（事業継続計画）と言う用語がもてはやされてきたが、東日本大震災ではほとんど役に立たなかった。「想定外」と言う都合のいい言葉で言い訳をしているが、そもそも災害等の緊急事態はほとんどが「想定外」である。

緊急事態とは原因事象ではなく結果事象であり、そこに共通しているのは劇的な環境の変化である。緊急時の初動期の動きとして安全確保は当たり前、それと同時に事業を継続するためには初動期に何をどうすべきかを日常から認識し、行動と対策を打たねばならない。

これには体験を重視し、演習と訓練による緊急時スキルアップを磨くことしかない。まさに BC（事業継続）力強化である。生活（人生）における個人のスリルアップも全く同じである。このことを肝に銘じて、これからの緊急時に対応していきたい。

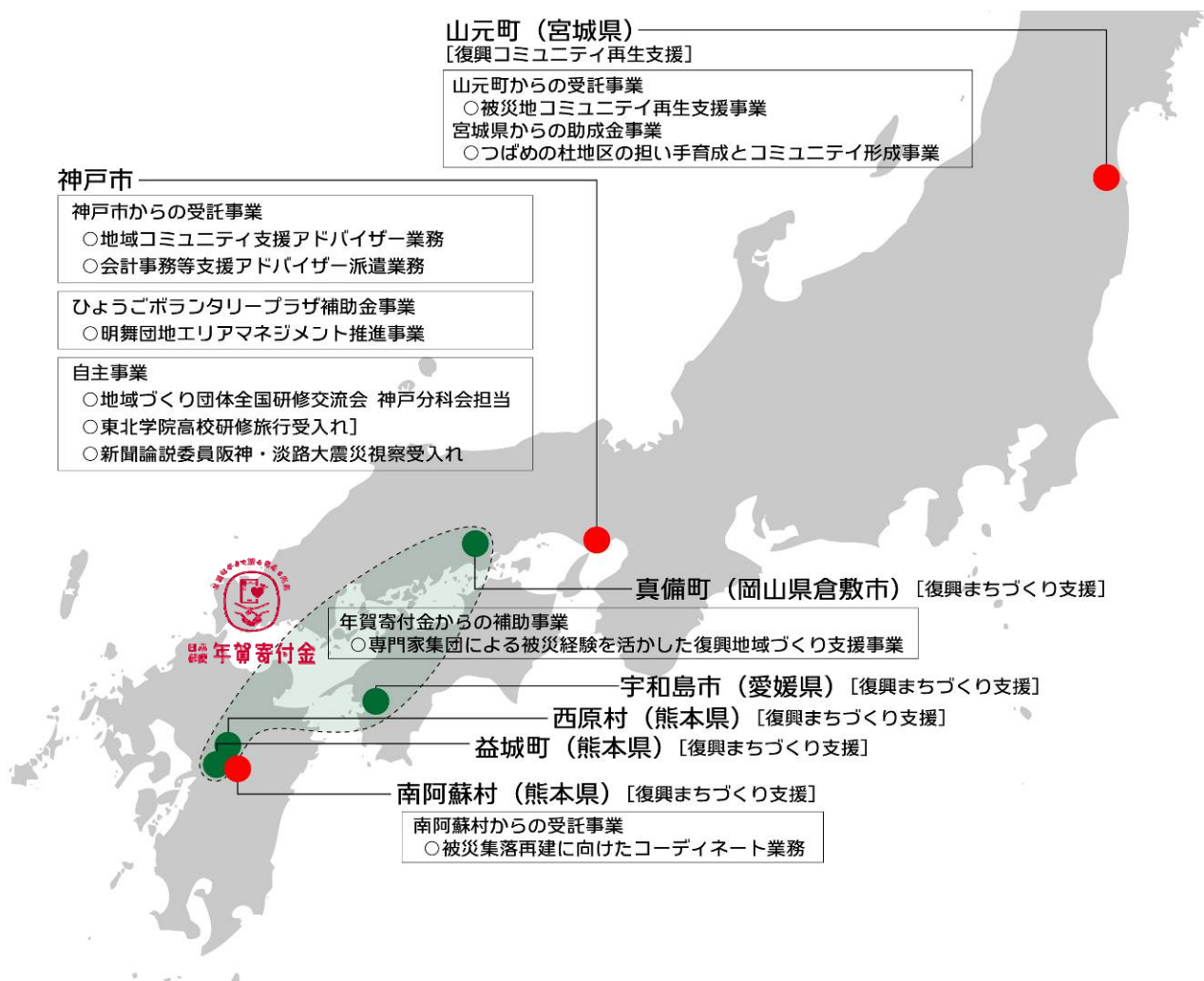


まち研事業 now 浅見 雅之（事務局長）

本年度のまち研の事業は主に、本拠地である神戸市内での事業と、被災各地の復興地域づくり支援に分けられます。

神戸市内での事業は、昨年度に引き続いて受託した「地域コミュニティ支援アドバイザー業務」と「会計事務等支援アドバイザー派遣業務」のほか、例年ボランティアプラザからの補助金で行なっている「明舞団地エリアマネジメント推進事業」を中心に、被災地視察研修等の受入れ事業を行っています。

被災地の復興地域づくり支援については、山元町・南阿蘇村からの委託事業のほか、宮城県の助成金や、郵便局の年賀寄付金からの補助事業なども活用していて分かりにくくなっているので、今年度事業を地図の上に表現してみました。（これでも分かりにくいね…）



被災地支援の取組みに関しては、会員の皆さんでご希望の方がいらしたら、野崎理事長・浅見（南阿蘇+山元）・辻信一氏の各活動（山元）の活動に同行することも可能です。まずは事務局までご相談ください。

まち活拠点「まちラボ」

川村 憲之（事務局）

10月1日にまちづくり拠点施設（神戸市立こうべまちづくり会館4・5階）がオープンしました。今号では4階のまちに関わる活動を支援する「まち活拠点『まちラボ』」の活動を紹介します。5階の24時間使用可能なブースタイプの「ワークスペース」（有料）は随時募集中（神戸市と直接契約）で、詳細は神戸市ホームページをご覧ください。

※「神戸市まちづくり拠点施設企画運営業務」を当研究所が受託して実施中です。

●オープニングイベント…10月5日（土）開催

「まちづくりラボの可能性とこれからの地域づくりについて」をテーマに、ゲストの前畑洋平氏、坂本友里恵氏、本田亙氏によるゲストトークの後、角野史和氏のコーディネートでゲストと参加者を交えての意見交換をしました。



●まちサロン…テーマ型セミナー、ラウンドテーブルなど交流・意見交換・ゆるりと過ごしています。毎週火曜日 18:30～21:00 に開催）

・10月15日 「まちづくりのための空中写真と地形図の読み方」 __辻信一氏

・11月12日 フリーテーマでのラウンドテーブル

・11月19日 「まちづくりのための市街地の地図の読み方」 __辻信一氏

・11月26日 「浅見さんとデザインの話」 __浅見雅之氏

・12月3日 「野崎さんとまちづくりの話」 __野崎隆一氏

・12月10日 「近代建築保存のデザイン 神戸の場合」 __中尾嘉孝氏

・12月17日 「まちづくりのための市街地の地図の読み方」 __辻信一氏

・1月7日 「七草粥について語ろう」 __山岸千夏（まちラボ担当スタッフ）

・1月14日 三谷が聞くシリーズ「東北被災地の現状を聞く」 __三谷真／3月分交渉中

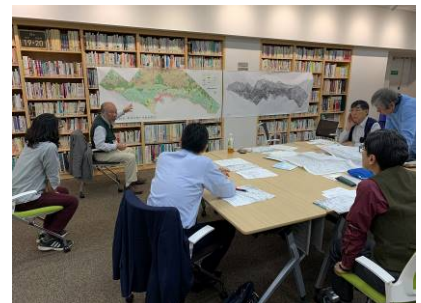
・1月21日 「まちづくりのための市街地の地図の読み方」 __辻信一氏

・1月28日 駅名妄想ワークショップ __古川建太氏

・2月18日 「まちづくりのための市街地の地図の読み方」 __辻信一氏

・2月25日 「ここが分からんまちづくり」 __初田直哉氏×前畑洋平氏

・3月17日 「まちづくりのための市街地の地図の読み方」 __辻信一氏



<KOBE 復興大>

・12月15日（日）「復興まちづくりと『アート』」 __島田誠氏+Bloom works

・12月22日（日）「復興まちづくりと『みどり』」 __辻信一氏+天川佳美氏

・2月4日 「震災復興／神戸・中越・熊本」 --それぞれの震災復興はどう進んだか

・2月11日 「震災復興は何なのか？」--震災復興と復興まちづくりの大討論会

●まちラボ・マニアサロン…たくさんの方が集まる面白い場所にするために、いろいろなモノ・コトの楽しさを共有する学び&体験セミナーを開催します。(要事前申し込み)

- ・11月24日(日) 日本酒のプロ・酒ディプロマに聴く日本酒セミナー
- ・11月27日(水) 「世界の KENTA と鉄道の話」_古川建太氏(まちラボスタッフ)
- ・12月1日(日) コーヒーのプロ・バリスタに教わるコーヒーのカッピングセミナー
- ・12月22日(日) まちラボ食べサロン 日中冬至文化交流会
- ・1月5日(日) まちラボ食べサロン まちラボカレー×クラフトビール

●まちラボ・ミーティングスペース…6人まで(椅子を追加すると10人?)の会議や小規模セミナーなどにご利用いただけます。予約も受け付けています。

●まち活カレンダー…地域でのまちづくり活動と人材のマッチングに取り組んでいきます。現在は、まちづくり活動がいつどこで行われているか、どんな人たちが活動しているかなどの情報がわかる「まち活カレンダー」を作成中。マッチングシステムも早期運用開始するべく準備を進めています。

●まちラボ・ライブラリー…神戸や兵庫の地域の情報、歴史、震災ら復興など、まちや地域に関する書籍や資料を約1万冊近く揃えています。

どなたでもご利用いただけます。貸し出しには登録が必要ですが、リニューアル前の登録は引き継いでいます。お一人3冊2週間までお借りいただけます。お勧め本の紹介もしていきます。



まちラボ・ライブラリー



●その他にもいろいろやっています！

- ・まちづくり専門家相談 DAY…小林郁雄氏、辻信一氏が常駐されている日を狙って
- ・神戸まちづくり研究会が開催している「まちづくり若手研修会」を支援しています。
- ・まちラボ café (ネスレドールチェグスト) …コーヒー、カフェオレ、ミルクティー(1杯100円)

【まち活拠点 まちラボへ 皆さん 来て下さいね！】

〒650-0022 神戸市中央区元町通4丁目2-14 こうべまちづくり会館4階

Tel/078-361-1550 Fax/078-361-1551 mail/kobe.machi.labo@gmail.com

Facebook/https://www.facebook.com/machilabo.kobe/ Homepage/準備中

発行:特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所

〒658-0013 神戸市東灘区深江北町4丁目8番19-202号 TEL:078-855-8520 FAX:078-436-2121

E-mail = LET07723@nifty.ne.jp Homepage = http://www.kobe-machiken.org/